健 康 の経済史とは何 か

英領インドの 飢饉 • 疫病と植る 民地 的開 発 (一八七一~一九二〇年

は 8 VZ

九 世 紀 後半 か ら二〇世紀前半に か けての 英領

1

ン 1,

ルチャー

化、

そして地税収

奪

および商業化が招いた農民層分

九二〇年代以降は、 八七一年から一九二〇年までの五〇年間の人口 のため 重なる飢饉と疫病による死亡危機 「飢饉と疫病 に、 〇・三七%にとどまっていた。だが、 死亡危機が減少し、 の時代」と言うべき状況 人 口増加率 (mortality K [増加 あ

率は、

たび

た。 は

ま

ささに

crisis)

%を超える

(図1)。

独立後インドの正統的

な歴史叙述では、

飢

饉

と疫

病

0

英領インドの人口変動における二期区分 図Ⅰ

1871~1920年

人口增加率 0.37%

頻発する死亡危機 (飢饉・疫病)=飢饉と疫病の時代

1921~1940年

人口增加率 約1.22% 死亡危機の減少

農業の

(農

民の土地喪失) 基盤を脆弱化

などが

甚大化を招い

たとい

うの

が 飢

お 0

饉

通説化し、 教科書の中にも反映されてい およその議論である。 このような歴史叙述は、 日本のある高校歴 半

ば

脇 村 平

された農業の商業化(→モノカ による収奪、 に言うと、 地税(land revenue) それによって強制

停滞に起因するものであるとされてきた。

もう少し具体的

時

代

は

植

民地統治下における収奪とそれによる農業の

るが、 が、 ほどである。 放棄や輸出用作物の栽培などによる農業基盤の衰退など スーンの降雨不足による干ばつなど自然的要因が挙げられ 部分で、次のように書かれてい 指摘されている」 植民地支配期には、 一九世紀後半の植民地インドの飢饉 地税のきびしい収奪による耕作 る。 「飢饉の要因 に触 VZ は E n た

なく、 ことがわかる。 は、 な過程をつぶさに見てみると、 叙述が、 言えない。 の農民が土地を喪失する過程もそれほど顕著であったとは 長基調にあったと言える。 農業の商業化が食糧生産の後退を導くというようなことも 二〇年頃までの約半世紀は、 す歴史叙述であろうか。近年の研究に基づきつつ経済史的 かし、これはこの時代のインドの現実を正しく映し出 むしろ「成長」という言葉がふさわしい時代であった 食糧穀物及び商品作物の生産はともにある程度は成 経済史的な説明として成功していないことを指摘 このように、 実質的な地税負担は軽減化されていたし、 飢饉・疫病に関する通説的な歴史 また、 農業の 一八七〇年代初頭から一九 農民層分解という、 「停滞」というより 多数

それでは、この時代に飢饉と疫病はなぜあのように多発

であったのだろうか。

であったのだろうか。

な、やはりこの時代の経済史的な過程と深く関連するものは、やはりこの時代の経済史的な過程と深く関連するものであっただけなのか。それとも、かかる現象不幸な時代であっただけなのか。それとも、かかる現象であったのだろうか。

のが、 済史に関わる方法論を論じる。 したのもこの主旨に発している。 最終節で本稿全体を総括する予定である。 の論争の係争点に一つの解答を与えることが目指され 釈に健康という側面を明示的に導入することによって、こ 整理する。 の飢饉・疫病に関連して、 題領域を経済史の中で明確に位置づける必要があるとい この問いに答えるためには、 本稿の主旨である。「健康の経済史とは何か」 さらに第三節では、 インド経済史像をめぐる論争を かかるインド経済史像の解 続いて、 「健康」 以下、 第二 第一節で健康の経 (health) 節で当該時 といい と題 う問 期

位置づけられうるか 一健康は、経済史において如何に

は、これまで財もしくは所得に存在したと言っても過言で経済史という専門領域(discipline)の主要な関心対象

あった。 的変化、 場合には、 の生産、 くは所得の数量的変化によって測られてきた。 題であった。その はない。 その達成あるい 工業化以降の経済では、 経済史の基本的 U V 主として食糧生産を中心とする農業生産 ては所得 は失敗が経済史における中心的 経済発展の程度は、 の数量的変化が研究課題の中 な関 心が、 工業生産を中心とする財 経済発展 もっぱら財 版の過程 農業社会の 0 数量 心に な主 to 向 け

くも はな 福祉=厚生を決定する最重要の要因であることは否定すべ ると言うべきである。 の数量的変化の追求が経済史研究の最終目標であるはず living) 福祉=厚生 べき中心的 しかし、 ない。 それは、 の展開過程にあるとするならば、 基本に立ち返ってみよう。 な研究課題は何であるべきか。 (well-being) あくまで手段であり、 それ自身が内容そのものをなすわけで むろん、 すなわち生活水準 財 所得 目標に至る過程であ 経済史が明らかにす の多寡が、 財もしくは所 それが、 (standard 人間 人間 が 得 of 0 0

が身体的な活動を余すところなくなしえているか否かは、 康 は 人間 0 福祉 II 厚生の中 心的 な内容をなす。 人間

> 生を著しく損ねていたことは明らかであろう。 たとするならば、 域に生きる人々・集団が、 問題となる場合も存在する。 の個体別に様々である。 異なことではないであろう。 史の研究課題の一つに健康を位置づけることはまったく奇 人間 0 福 祉 11 厚生の重要な部分である。 それは集団的な意味での人間 しかし、 共通して健康被害に直 例えば、 言うまでもなく、 集団的な意味での健 ある特定の時 したがって、 0 健康は人間 面し 福 代 祉川 7 康 地 厚 4 から

てい クトル な機能が存在する。 病を免れているといったような、 それは、 合を指している。 が把握される空間 のことである。潜在能力とは、 ティア・センの潜在能力 (capability) 概念に示唆を得て るかという、様々な機能 筆者がこのような思考をするようになったの 3 人間がどのような状態にあり、 集合という点を重視し、 言うまでもなく、 (space) を指してい センは、 (functioning) 選択が可能 人間の福祉=厚生そのもの 選択の 健康状態のごとき基本的 様々な機能のうち、 る。 如何に活 な様々な機能 「自由」 のベクトルの集 言い換えよう。 を強 動しえて アマル のべ

11

さて、 センの潜在能力概念の画期性をわかりやすく図示

福祉=厚生をどの空間で把握するか

済学において、

人間

の福祉=厚生を把

握

す

て、

٤

12 か することにしよう (図2)。

これ

までの

経

効 用 財 機 能 (潜在能力)

> 効 般的に使用されてきた空間である。 た空間で、 の容易さもあって、 (utility) とが考えられてきた。 る空間 甮 は 理 功 論的な想定として考えられてき 利 主義以来の経済学の 財 経済学分析にお (commodity) 財は、 伝統 他 W 効 計 方、 7 VZ 測 用

> > き、

る。 従ってい 次に、 る。 それ 人間 らを消費して、 は様々な 「財」 状態や を獲 得 活 動 す

る。

W

図 2

間 意とは、 結を、 としての にある機能の次元で把握しようとすることに 効 甮 心理的な は あく 人間 機 能 まで理論的な想定であるので措くとして、 0 福祉=厚生を、 「効用」として感じる。 を実現する。 これらの三段階のうち さらに、 それらの機能 ある。 0

と機能 格単 位 の空間 0 計 を比較するならば、 測 が 可 能 という点で、 既に述べたように、 経済学においてこ 潜在能力概念の含 財 n 財 ま は 中 帰

で圧倒 価

的

に優先されてきた。

他方、

機能の空間

は通約

が

る。 は、

易でない

うこともあって、

考慮の対

象外とも

言える

取 容

り扱いを受けてきたのである。

しか

L

財

0

獲得と機能

0

能の 祉=厚生を比較するとき、 それぞれ しよう。 実現を等値することは正しくない。 る。 L そこでは大きな格差が生じることになる。 V この場合、 1 Aさんは健康状態にあり、 同額 の状態 ルで測るかによって、 の所得を得ている二人の人が 二人が 活動 2 同額の所得を得てい V 財の消費のレベルで測るか う機能の次元に還元されると 大きく В 理解 さんは疾病に罹患して 差異が生まれ やす W たとしても、 るとする。 is 二人の福 例を提 てく 機 示

たなら、 所得 しも の社会における衛生状況、 つで異なっ 集団 う社会の住民は、 機能 財 を得ているとしよう。 0 の場合で考えてみよう。 健康という機能に現れる福祉 獲得以外 の実現と同じではない。 たものにならざるをえない。 の様々な条件を考慮 平均的 ひいては疾病環境が しかしながら、 VZ は Aという社会の 同 額 機能 0 11 に 0 (年間) 厚生 財 入れ 問 の獲得 もしこれら二つ 問題を考 0 る必必 住民とB 水準は、 異なってい 人当たり は 要が えるに 必ず あ 2

通常の経済史で主たる分析の対象とされる財や 後 論 0 展 開 0 ために、 本節での 議論を整理 所得レベル ておこう。

考えてみることにしよう。 を分析する必要がある。 では、 て、 すなわち生活水準の変化を追跡するためには、 での数量的変化を見るだけでは不十分である。 ルの分析に加えて、 一九世紀後半から二〇世紀初頭の英領インドの その時代・地域の人々・集団の福祉=厚生の変化 機能レベルで把握される福祉=厚生 以下、 健康という機能に着目 財 定の • 所得 事 例 事 を V 例 L

二 一九世紀後半~二〇世紀初頭 ンド経済 0

を進めた。

(1)ナショナリストとリヴィジョニスト

36 的 示し 世紀後半から二〇世紀初頭にかけてのインドは、 叙述の中で如何に描かれてきたであろうか。 スト史観は以下のように論じている。ここでは、 飢饉と疫病が頻発し、 た、 論として、 かつて 0 通説的な歴史叙述、 スミット・サルカールの議論を紹 多大の人的被害をもたらした一九 すなわちナショ 本稿の冒頭で その 経済史的 介す 典型 ナリ

1 富 る本国費などの形態でイギリス本国に流出し、 0 流 出 地税などで収奪されたインドの 富 インド は V iz わ お 10

> た、 めに、 ②農業の商業化 食糧穀物の作付けを減少させ、 程であった。すなわち、 よって牽引されつつも、 ける投資のための余剰を著しく減殺した。 商業化は農民の高利貸しへの依存を深め、 商業化を強制された。そして、 ―農業の商業化は、 農民は重い地税と地代を支払うた 植民地支配によって強制され 飢饉の惨禍を増幅した。 鉄道建設、 商品作物への転換は 農民層分解 輸出増加

た過

KZ

ま

③農業生産 とはなかった。 は、 半封建的な搾取関係に依存し、 連の破滅的な飢饉を招いた。 商業化で利益を得た大地主、 したがって、農業生 農業生産に投資するこ 産の増加はほとんどな 高利貸

釈を例に、 チ 立ちつつ、近年の経済史研究を総括的にサーベ の試みがなされてきた。 究(ここでは、リヴィジョニストと呼んでおく)では相対化 うなナショナリスト的経済史像に対して、 うな経済史的過程の必然的帰結ということになる。 + ナショナリスト史観 1 ルズワー それを見てみよう。 ス、 В では、 次に、 R . 飢 IJ ムリンソン、T・ 饉と疫病 ヴィジョ 0 ニスト 近年の経済史研 頻 発は、 イしたN D 0 視点に 1 Ö のよ

物価格の伸びが大きく上回ったため、実質的な地税負担は①一八五〇年代以降、地税の名目額の伸びに対して、農産

た。 の土 さらに、 作物が食糧穀物に代替するというようなことはなかっ て商品化を進めたのである。 よって、 ②農業の商業化は、 軽減化していった。 イニシアチブで進んでいった。 地の 農産物価格の上昇が起こり、 農民負債の深刻化によって、 移転というようなことも顕著には起こらなかっ 強制されたものというよりも、 また、 鉄道の建設と輸出増加 商業化によって、 農民から高利貸し 農民はそれに反応 農民 た。 商 品 に 0

また、 は、 像である。 鈍化し停滞局 遅くとも第一次世界大戦までは成長基調にあっ ③農業生 これらの指摘が前提にしているのは、 早経済 値 象徴される交通革命は、 八六九年のスエズ運 産の 0 低いバラ荷貨物の輸送を飛躍的に増加させた。 一八五〇年代以降のインド農業を規定した 増加 面に入るのは、 (貿易) は、 の急激な発展である。 決して大きなものではなかっ 河の開通は、 第一次世界大戦以降である。 輸送費を大幅に切り下げ、 次のような経済史 こうした過程を 鉄道と汽船 た 成長が た が、

第一次世界大戦まで、綿花・小麦・油用種子、ジュート、加速させた。こうして、インドでは特に一八七○年代から

輸出増加に牽引されて、農業の商業化が進行したというこ茶、米といった農産物の輸出が大幅に増加した。こうした

(2)「熱帯の発展」とインド

とになる。

て、 ると、 済の変化の中にインドを位置づけてみるならば、 ストの経済史像の方が説得性に満ちてい は自ずと明らかであろう。 ン」としつつ一定の成長をしていたとする、 ナショ インド経済が、 どちらがより説得的であろうか。 ナリストとリヴィジョニ 農産物輸出 世界貿易の急速な発展 の増 ストの経済史像を比較 加を その当時 「成」 1) 長 ヴ 0 その答え VZ 1 0 呼応 世 I 3 ンジ 界経 E す

F カの工業化によって、 第四四半世紀に、 経 W ル単位) 済的進歩の研 • A 八八三年 の成長率 ル イス編 から一 交通革命ならびにヨ 究8 (年間) 九一三年に によると、 熱帯の発展 次産品輸出 は 当 熱帯諸 かけて熱帯諸 (一八八〇—) 時 0 0 急速な増 1 世界 国は、 ロッパ の工業生 加を経 玉 九一三年 九世 北アメリ 0 輸出 産 験 成 0

態であったことが指摘されてい 農が開墾などを通して余剰地を獲得して商品作物を作付け 長 した結果であり、 ンスは、 交通輸送手段の革新に応じて、 をわずかに下回るが、 これらの熱帯諸国 小農自らの 意志決定によってなされ る の高い輸出パフォ 三・四%とい これらの諸 玉 う高 た事 1 0 1 7

第一次大戦後の戦 づけるキーワード 主義」、「搾取」、 長をしていたという点である。 年にかけて、 いとまで言い切っている。 研究が示唆しているの 熱帯諸国の経済が一次産品輸出主導の経済 「富の流出」などといったこの時代を特徴 間 が 期に入ると、 喚起する歴史像とは必ずしも一致しな しかし、こうした成長基調は は 彼は、 消滅したのであ 八八〇年から その点が、「植民 0 た。 九 地 成

が食糧 の熱帯 率は、 の中でも低い例に属する。 インドも同じである。 二・八%であった。 経済全体にとって一定の 穀物に代えて商品作物の作付けを行う余裕がそれ たためであると指摘さ 国に比して、 土地人口 同時期におけるインドの輸出成長 その理由として、 インド n 比率が小さい 「成長のエンジン」となっ てい の輸出成長率は熱帯 る。 それ インドでは他 ために、 にも か 農民 諸 か ほ 玉

> とは間 それらの成長率は鈍化したのである。 二一一一九四六年) 世界大戦までの時期 られた。 生産は食糧穀物と非食糧穀物ともに、 たことは疑いを入れないであろう。 違い これは、 ない。 だが、 輸出増加に牽引されてのことであっ に、 (一八九一一一九一 世界貿易の停滞 第一 次世界大戦以降 表1によると、 0 定程度の 六年)に 影響を受けて、 0 時 成長が は、 期 第 二九 たこ 見 次

れば、 る。 増加率が低く、 は、 と疫病を免れていたという逆説的な事態が見られ も農業成長が見られ が頻発したために、 である。 成長率は鈍化する。 (表2)。一九世紀末までは、 ここで注意しておきたい 玉 であったのだ。 一%近くの成長を示しているが、 民所得の推計に関してもほぼ同 同様の傾向を示しているのは当然のことである。 言うまでもなく、 後者の時期にそれが一%を超えていること 他方、 た時 人口増加率が低かった。 国民所得に占める農業の大きさを考え 期こそ、 農業の完全な停滞期 前者 のは、 農業及び全体におけるN 0 時 前者 むしろ 期 二〇世紀に入ると、 様のことが KZ 0 おい 時 飢 期におい 饉と疫 て飢 わずかなりと に 判 は 饉 たのであ 明 と疫病 て人口 病 する D P

	1891—1916年	1921—1946年	
人口	0.44	1.12	
全 作 物	0.84	0.34	
食糧穀物	0.61	0.03	
非食糧穀物	1.66	1.08	

(出所) Tirthankar Roy, *The Economic History of India, 1857–1947*, New Delhi, 2000, p. 57. この表自体は、もともとジョージ・プラインの研究に基づいている。G. Blyn, *Agricultural Trends in India, 1891–1947: Output, Availability, and Productivity,* Philadelphia, 1966. なお、ロイによる計算の誤りは訂正した。

表 2 国内純生産(NDP)の成長率(1868-9~1946-7年)

(年率%)

	農業 NDP	全体の NDP	人口	一人当たりの NDP
1868~98年	1.01	0.99	0.40	0.59
1882~98年	1.08	1.29	0.51	0.78
1900~46年	0.31	0.86	0.87	-0.01

(出所) *Ibid.* p.52.この表自体は、もともと以下の研究に基づいている。A. Heston, 'National Income', in D. Kumar (ed.), *The Cambridge Economic History of India Vol.2: c*1757-c.1970, Cambridge, 1983; S. Sivasubramonian, 'Revised Estimates of the National Income of India, 1900-01 to 1946-47', *Indian Economic and Social History Review*, vol.32, no.2, 1997.

内 発し 時代でも なこと 5 は、 方 こうし るとするところ VI 導入 生 な 7 K n L 多数 現 to 対 的 た 12 疫 7 基 を n に 時 とさえ言える。 本 ヴ た姿勢そ す VZ 病 0 あっつ to た論 たと る人 自然現象とし 組 位 的 1 は 期 0 0 7 3 ナ 頻 K 死者をも か 置 る必要 込 発 3 争 3 41 は 大状況 か う説 ま 0 E 2 彼 圧 H ら出 世 5 ナリ 経 n ス to 0 2 紀 たら かい を VZ 高 た場 済 1 0 0 11 か 打開 後 史的 考 は あ なるであろう。 3 発 ス ま 7 0 与 半 る。 合 n 解 0 経 尊 L 1 えら から二〇世 た事 釈 場 す が VZ 飢 過 0 済 重 7 0 史像 され 饉 合 程 外 経 るために 次節では、 は 61 n 側 か 2 態こそ説 済 たと考えることも 飢 7 出 疫 7 史 饉 7 は 0 に 関 VI 置 L 像 病 は ル 紀 な は + 連 か は 疫 から 初頭 か るべ そうした解 な 頻発 明され が 17 病 ス 定 n 飢 的 深 饉 健 0 飢 0 61 ま 経済 康 ような現 な意 で きである。 饉 生 るべ 追 す 7 疫 あ 味 水さ る は 成 3 的 病 できる 疫 Us きで 釈 う ま 長 な変 0 病 11 を 視 は が n 頻 7 が 見 提 た 数 あ 土 飢 他 頻 野 7 発

\equiv 飢 饉 • 疫病と植民地的 開

(1)

考えることにしよう。 言うまでもなく、 そこで、初めに飢 飢饉と疫病はその原因と特質が異 饉と経済史的過程との関連に つい 7

この アの 長期的 る必 る。 南西モンスーン アジアにおける飢饉は、 て、少なくとも一一 九七年、一八九九─一九○○年の三大飢饉をはじめとし 多くの地域で半ば周期的に起こってきた。では、 この時期の飢饉もほぼ同じことが言える。 九世紀後半の半世紀に、一八七六一七八年、一八九六 一要がある。 時 期に な変動という問題は残るにしても、 飢 饉 0 による多大の人的被害が生じたのかを考え 不調 回の飢饉に見舞われ による旱魃を直接的 わずかの例外を除けばことごとく ている。 旱魃は、 原因としてい 降水量の中 古来、 南 なぜ アジ 南

わ

の時 したとは言いがたい。 を除けば毎年、 九世紀後半から 該時 期 0 インドでは、 二九一 食糧穀物を輸出し続けている。 旱魃による凶作が深刻な場合に、 〇年代末までインドは、 食糧 の絶対的な不足が存在 このよ 大飢 地 饉

> て絶対的 送手段の発達により、 域的には な食糧不足は解消されたはずである。 発達により、他地域からの食糧穀物の移入によっ 食糧不足が顕著になったであろうが、 の輸

段も喪失することになった。こうした事態こそ、 者の数は、 害はより「階級的」 ティア・センの言う食糧エンタイトルメントの喪失に他な 作によってこれらの雇用を失い、 業の雇用を得て生計をたてていた。 有しないために、土地を有する農民の下で収穫などの農作 地域に容易に移動できるようになったけれども、 ある。輸送手段の発達によって、食糧は余剰地域から不足 る一定の階層・集団に集中したという点に注目する必要が 不足して住民全体に被害が及ぶというよりも、 ゆる下層カーストに属していた。 したがって、 農業労働者、 飢饉の被害は、 現象になったと言える。 職人層、 当該地域の食糧が絶対的 零細農に多く、 同時に食糧を確保する手 しかし、 彼らは通常、 飢饉 旱魃による凶 農村に 飢饉 彼らはい 土地を所 による死 T の被 お

失にあった。こ (12) (12) らな(1)11 況にお いて、 したがって、英領イ より顕著になったとさえ言える。 このような状況 集団における食糧エンタイトルメント は ンドの飢 輸送手段が整備された状 饉 0 本質は、

期に悪化していたことを意味する。成長が均霑効果を有し滞していたとするならば、農村における所得分配がこの時 所得は全体として増加しつつ、農業労働者の実質賃金が停 る食糧価格の上昇に対して貨幣賃金は変化しなかったため ほとんど上昇しなかった。注意すべきは、飢饉の際におけ 研究が示すところでは、 農村の下層にも均霑効果を持ったか否かである。数少ない 長が見られた時代であった。 代から一九〇〇年頃にかけて)は、 前節で述べたように、 実質賃金が大きく低下したことである。農村における 農業労働者の実質賃金は趨勢的 飢饉が頻発した時期 問われるのは、成長がかかる 緩慢とはいえども農業成 (一八七〇年 12

(2) 飢饉・マラリア連関

ことにする。

ことの一つの重要な原因であった。

なかったことが、この時期の飢饉の人的被害が大きかった

であった。特に、飢饉時において死亡原因となった疫病とによる死亡よりも、圧倒的に多かったのは疫病による死亡特に人的被害が大きかった大飢饉において、直接的な飢餓ける死亡原因の分析を行う必要がある。当該時期の飢饉、飢饉における膨大な人的被害を考える場合に、飢饉にお

との相乗効果によって、 力の低下と、降雨という環境条件(→アノフェレスの繁殖 中でも最も悪性のマラリアが、栄養状態の悪化による抵抗 機となって、流行する。 養状態が悪化する飢饉の直後に、モンスーンによる多雨 この疫病マラリアは、 ける死亡率上昇の最大の「犯人」と言って過言では ラリア」(epidemic malaria) と呼ぶべきもので、 直後に起こったマラリアの流行である。 れる。このうち特に重要なのは、 こでは、このような現象を「飢饉・マラリア連関」と呼ぶ (マラリアを媒介する蚊 [アノフェレス] の繁殖を招く) い。しかし、多くの場合、 飢饉と連関して起こるとは限らな 多くの人命を奪ったのである。こ 熱帯熱マラリアというマラリアの 農業労働者等の農村貧困層の栄 多くの場合におい これは、 飢饉に 「疫病 て飢 な が契 61 お 饉

五年、一九○八年、一九一一年、一九一八年の各年にみらピークは、一八七九年、一八九四年、一八九七年、一九○ ると、死亡危機 (mortality crisis)、すなわち死亡率の年から一九四八年までの普通死亡率の年々の変動を見てみ年者が検討した北インド・連合州の事例では、一八七三

マラリアが挙げら

しては、

コレラ、天然痘、

赤痢・下痢、

連合州における死亡危機の原因

1879年 飢饉+疫病マラリア (飢饉・マラリア連関)

1894年 コレラ+疫病マラリア

飢饉+疫病マラリア (飢饉・マラリア連関) 1897年

1905年 ペスト

飢饉+疫病マラリア (飢饉・マラリア連関) 1908年

が

規

模な流

行を含めると、

その

他

VZ

J

V

ラ、

天然

痘

時

期

0

死亡率の押し上げに貢献

た

死亡危機では、

ペストとインフル

I わ

>

ザ

が

数

べえら

ペスト 1911年

1918年 インフルエンザ

こと 者 饉 は \$ 数 疫 が しく 病 増 わ 幅 は疫病に起因し か マラリ に大き る が P な 特 0 影 流 VZ 響 飢 行 7 を かい 饉 及 死 0 W IF 際 3

> は、 流

り、 るようになる)。 あっ 以降、 (その 一代末 のように、 表3のようになる。 n た 人口 ため まで 以 0 降 か 増 に、 K 0 を 加 死亡危 は 時 概 率 れら 全く 期 九二〇年代 観 は に L みら 0 起 %を超 機 7 年 きて は、 3 K n 創. る 何 え 初 お 現 n などもこの る。 連

頭

くが 連合州 する その 疫 疫 小 0

他

飢饉

すなわち食糧

不足 61

からは全く独立

L

て

発

原 わ

大

とし

7

ると

4

う点であ

3

2

病

\$ に

数多く

・起こっ

た。

表 3

か

らも

かるように、

(3)疾 合州 病 環 病 境 7 0 0 ラリア 事 例 か を 5

か

る

0

は、

飢

饉

絡

2

0

死亡危

機

0

多

n

る。

n

5

は、

す

1

7

九

在していた。 全体を総括的に言って、 (disease environment) 連合州 行 2 は n ぞれ 多数 ど 限ら 特 疾病環境 0 有 死 n な 0 者をもたらした。 原 17 0 因 0 その 悪化とは、 こうした疫病の多発には 「があるだろう。 悪化 他 とい の地 う共 域 か 間 でもこれ かる疫 通 だが、 かい 感染 0 問 病 題 英 5 症 状 疾病 領 0 VZ 0 罹 況 流 疫 1 環 行 患 が > 病 境 F. 存 す に 0

で疫 効率化をも になることに 病 疾 病 に 0 環境 章 たら 延 鉄 道 VZ 0 よっ 悪化 は L 0 負 7 発 7 飢 達 0 効果 饉 は あ 0 る種 を 影 既 以下の三 to に述 響 0 た 0 感 5 緩 1 染症 たように、 和 た VZ は 作 確 用 間 実 L VZ た 食 0 流行 から 糧 移 動 流 が 他 通 0 程 盛 方 0

関

とで ラ、

も

言う 例

1 お 究

3

現

象

多

数 ような 時 • 0

確

認

n に

7

61

ま

た、

る。15マ

赤

痢

痢

など

0 が、

疾

病

to

飢

饉 3

連

関

て数多く

0

地

域 斎

0 藤 ること 修

事

12 研 から

25

ても、

0

飢

饉

、ラリ のそ

T

連 他 1

期

0

VZ

は、

0

0 指

要因

が

あ る。

2

72 16

併 J

7

いることも注意すべきであろう。

ナ、

0

ょ

0 て、

百

期

の英領

イ

ンド

0

る可

能

性

を高

8

るような環

境

の変化を

7

11

0

時

L

7

注

目

3

n

る。

T

7

イソン、

A

•

7

11

ラ

81

連は、 カッ 染もまた故郷にもたらすことになった。このような因果関 度と範囲を増幅させた。 るであろう。 名であるが、 この地域におけるペスト死亡率の高さの基本的 ていた。 タやボンベイなどへの出稼ぎ労働者の出 コレラや赤痢・下痢などの流行に関しても当ては すなわち、 このような労働移動は二〇世 見、 風土病的な性格を持つマラリアです 出稼ぎ労働者は、 例えば、 連合州 0 帰 紀 東 郷ととも 身地とし 初 部 頭 は 原 VZ 大 お 7 に 力 有 ま 感 ル 11

都市 は、 行に少なからず影響を及ぼしたであろう。こうした現 て 化の傾向が限界をともないつつも始まっている。 ドでは、 についても当てはまる。 ボ 都 ンベ 市に 農業の イや おける衛生状態の悪化は 力 商業化と一定の工業化にともなって、 ルカッタなどの大都市のみならず、 コレラやペ ス したが 1 地 0 都市 象 流

第二に、

一九世紀後半から二〇世紀初頭にかけての

1

もう一つ

事

例を挙げよう。

世紀

中

部

VZ 九

お

疾病環境の悪化

が悪性マラリアの流行を招く場合がある。

労働移動

ラリ 環境の変容に起 進んだ連合州 第三に、 アの事例で この あ 因 時 西部のドアーブ地域では、 3 期 してい 0 疫病のい 九世 た。 紀 最も典型的 < の後半に潅 5 か んは、 な 用水路 漑用 開 0 発に は 水 の普及が 路 B よる自 は 0 建 ŋ

が

浸水地 饉 ラリア 7 の拡大に帰結し、 0 罹 患要因を高 P め ノフフ たと言える。 I V ス の繁殖を促進 このことは 7

ラリ 疫病(健康被害) ア連関 が た回期 らも ラリアの流行は死亡率を高め、 アーブ地域周辺に集中していることか 発生し 0 わ かる。 た際に、 変動に少なからず影響を与え しば 高 しば起こっ 11 死亡率がこの た疫病 この 時 飢

市 都 化 疾病環境の悪化 自然環境の変容 bund) 州 は、 病 か 加を著しく抑制した。 後半のベ る疫病マラリアの 西 マラリアの 「ブルドワ 部 現象に起 0 ンガ デ ル 流 ル 4 州 熱 0 西 病 部

図 3

人 0 移 動

開発

VZ になされたマラリア研究によると、 氾 濫が タの 死亡率の上昇をもたらし、 死滅 繰り返されることによっ 化 因するも 行が見られ は 流行 二〇世紀 死 と呼 は、 ともと増水期 のであった。 滅 化 ば ~ た。 > 人口 n 0 (mori て土 ガル 2 前半 る 増 n 疫

7

濫が起こらなくなることによって、土地の肥沃度の低下を招くような現象を指している。加えて、デルタの死滅化は、アノフェレスの繁殖を促進し、マラリアの流行にもつなが、鉄道や道路の建設にともなう開発によって引き起こされた点である。

地

の肥沃さが保たれてきたベンガル

のデルタにおい

て、

氾

期であったと総括できる。 にかけては、 もたらされた事態であり、 いった三つの要因が合わって、 感染症の罹患率を上昇)させ、 以上のように、 (図3)。これらはすべて、 このような開発 人の移 動、 九世紀半ばから二〇世紀初頭 活動が最も盛んに行われた時 都市化、 健康被害を帰結したと結論 この時期 植民地的開発によっ 自然環境の変容と の疾病環境を悪化 7

おわりに

うまく説明することはできないと指摘している。すなわが死亡危機を導くとするマルサス・モデルによって現実を代にいたるヨーロッパの人口史を検討した上で、栄養不足歴史人口学者マッシモ・リヴィ=バッチは、中世から近

境要因によって規定される方が一般的だとしてい て発現したのであった。 は、 とになる。 サス・モデルでは、 起されるというよりも、 のバランスが崩れたときに栄養不足を原因として起こるこ 飢饉・疫病の被害は感染症を主因とする健康危機とし 感染症が引き起こす死亡危機は、 しかしながら、 飢饉にせよ疫病にせよ、人口と食糧と 栄養の問題とは独立に、 ヨーロッパ史の事例の多くで 栄養不足によって惹 る。 むしろ環 マル

うに、 因 る。 合的である。 給の動向、 た事例についても妥当するように思われる。 ヴィジョニストのより実証的に根拠のある経済史像とも をもたらし様々な感染症の跋扈を導いて、 を帰結したとい を説明するよりも、 このようなヨー たと理 を重視すべきであろう。 すなわち、 農業停滞が招いた食糧不足が 解する方が すなわち「栄養」 ただし、 うよりも、 この時期に経済成長はあったが、 ロッパ むしろリヴィ= 適切 次のように 人口 である。 植民地 ナショ 一史から から、 的開 この 再 ナリストが主 バッチが言う「環境要 「飢饉と疫病 の示唆は、 解 発が 飢饉と疫病 因 釈される必 果 健 疾 関 病環境 所得や食糧 康被害を帰結 本稿で の時代 張するよ 0 開 0 時 がが 1)

まり、死亡率が上昇せざるをえなかったと。にともなって、人々の感染症への罹患の可能性が著しく高

という視点が必要であるという主張も、このような認識にという視点が必要であるという主張も、このような認識にセンの指摘のように、財・所得の次元と潜在能力(機能)の次元を区別する必要がある所以である。「健康の経済史」としても、健康という潜在能力(機能)の次元で把握されとしても、健康という潜在能力(機能)の次元で把握される福祉=厚生が高まった仮に財・所得の次元で把握される福祉=厚生が高まった

基づいている。

象の究明のみならず、 稿で取り扱ったような、 能であろう。そのためには、経済史が医学史および環境史 との学的連携をいっそう進めることが重要になる。 の経済史」という方向性をより明示的に打ち出すことが可 でに多くの達成をなし遂げてきた。しかし、今後、「健康 するものであろう。言うまでもなく、歴史人口学はこれま ような方向性は、近年の開発研究の動向ともおそらく呼応 康」という要因を加えることが決定的に重要である。 こうした研究方向をさらに進めていくとするならば、 生活水準の変化を計測するためには、その指標に 日常的な健康現象の究明にも研究を 飢饉 ・疫病のごとき異常な健康現 この 「健 本

の適応過程としての医療・衛生行為を経済史の中へ位置づさらに深化させる必要があろう。また、人間による疾病へ

ける必要すらあると思われ

る

(1) 本稿は、拙著『飢饉・疫病・植民地統治―開発の中の(1) 本稿は、拙著『飢饉・疫病・植民地統治―開発の中の

- 拙著の序章及び第一章を参照されたい。 への影響などについて詳しくは述べない。詳細は、前掲(2) 本稿では、この時期の飢饉や疫病の頻度、規模、人口
- 二六九ページ。
 二六九ページ。
 一二六九ページ。
 一二六九ページ。
- (4) 言うまでもなく、経済発展を可能にする技術や制度に(4) 言うまでもなく、経済発展を可能にする技術や制度に
- 三年、三五―五七ページ。また、ナショナリスト史観の(6) スミット・サルカール著(長崎暢子他訳)『新しいイ(6) オミット・サルカール著(長崎暢子他訳)『新しいイガー潜在能力と自由』岩波書店、一九九九年。

典型として次も参照されたい。ビパン・チャンドラ(粟

- 7 son, The Economy of Modern India, 1860-1970 pp.51-113 nomic History of India, 1857-1947, New Delhi, 2000 Cambridge, 1993, pp.51-67; Tirthankar Roy, The Eco. omy, 1800-1914, London, 1982, pp.20-28; B.R. Tomlin. N. Charlesworth, British Rule and the Indian Econ
- (∞) W. Arthur Lewis (ed.), Tropical Development, 1880 書で取り扱われている熱帯諸国は以下の通りである。コ -1913: Studies in Economic Progress, Surrey, 1970. 本 フィリピン、インド。 ヤ、ウガンダ、エジプト、セイロン、インドネシア、 ロンビア、ブラジル、黄金海岸、ナイジェリア、ケニ
- 9 改善を望めない地域との間では格差は非常に大きかっ 産が急速に伸びた地域と、他方でこのような潅漑条件の の発展にともなって農業の商業化が著しく進み、農業生 い。パンジャーブ州や連合州西部のように、潅漑用水路 ただし、英領インド内部での地域格差も非常に大き
- 10 が短期的には負の効果を持った可能性はある。また、食 食糧穀物の量が減少したことも事実であろう。このこと の発達によって、逆に農村において農民が備蓄していた 前掲拙著、一四二―一四四ページ。ただし、輸送手段 っそう進めるという可能性は常にあった。M. Raval 「流通が活発化したからといって、商人が投機のために い占めや売り惜しみをすることによって、価格騰貴を

- 11 書店、二〇〇〇年。 lion, Markets and Famines, New Delhi, 1987, pp.18-19. アマルティア・セン、黒崎卓他訳『貧困と飢饉』岩波
- 12 前掲拙著、一四四一一四七ページ。
- Tirthankar Roy, op. cit., pp.80-84
- 14 13 この項に関しては、詳しくは前掲拙著、 第二章を参
- 15 ジア4) 東京大学出版会、二〇〇二年 と死亡と人口変動」、柳澤悠編『開発と環境』(現代南ア Historical Perspective, New Delhi, 1996; 斎藤修「飢饉 Maharatna, The Demography of Famines: An Indian Part II', Population Studies, vol.45, no.2, 1991; A. do., 'On the Demography of South Asian Famines Famines, Part I', Population Studies, vol.45, no.1, 1991 T. Dyson, 'On the Demography of South Asiar
- 16 ര° I. Klein, 'Population Growth and Mortality in 1990; I.D. Derbyshire, 'Economic Change and the Rail Economic and Social History Review, vol.27, no.1 India, Part II: The Demographic Revolution', Indian 1989; do., 'Population Growth and Mortality in British Economic and Social History Review, vol.26, no.4 British India, Part I: The Climacteric of Death', Indian おける疾病環境の悪化について、先駆的に指摘したの 前掲拙著、一四九一一五三ページ。なお、この時期 I・クラインとI・D・ダービシャーの研究であ

- ways in North India, 1860-1914', Modern Asian Studies vol.21, no.3, 1987.
- (\(\text{\tin}\text{\texi}\text{\text{\text{\text{\texi}\text{\text{\texi}\text{\text{\text{\texi}\text{\texi}\text{\text{\text{\text{\texi}\text{\text{\texi}\text{\text{\text{\texi}\text{\text{\tex
- (2) N. Crook, India's Industrial Cities: Essays in Economy and Demography, New Delhi, 1993, pp.8-15; R. Ramachandran, Urbanization and Urban Systems in India, New Delhi, 1989, p.67.
- 《1ジ。(2)この点について、詳しくは、前掲拙著、九九―一〇一(1) 前掲拙著、七〇―七一ページ。
- (21) 開発が引き起こす社会や環境の変化が原因となって発生する疾病を「開発原病」と呼ぶことができる。以下をを明されたい。見市雅俊「病気と医療の歴史―開発原病を・脇村孝と帝国医療をめぐって」(見市雅俊・斎藤修・脇村孝平・飯島渉編『疾病・開発・帝国医療―アジアにおける平・飯島渉編『疾病・開発原病」と呼ぶことができる。以下を高藤修「開発が引き起こす社会や環境の変化が原因となって発
- (わきむら こうへい・大阪市立大学大学院経済学研究科教授) M. Livi-Bacci, Population and Nutrition: An Essay on European Demographic History, Cambridge, 1991.